

専属雌穴徹底開発
サンプル

Produced by LETM

「武蔵君、ちょっと」

警護任務の打ち合わせが終わり、月影と紬と共にクライアント宅からおいとましようとしていた時の事だ。他でもないクライアントの男に、個人的に呼び出された。

念のため、仕事仲間二人に目線でお伺いを立てると、月影はにこりと笑って頷いて、紬にはとっとと行って来いとばかりに憎々しい顔で顎をしゃくって促された。紬の態度はまあまあムカついたので、クライアントに見られないように中指を立ててから改めて応接室へと向かった。

「どうかなさいましたか？」

「いや、実はね、君にちょっと見てもらいたい物があるって」

とある大企業の会長で、現在はセミリタイアしているこの男。たまに他企業との会合などがある際に民間のSSを雇う、月影鼯員の馴染み顧客である。基本的に暇を持て余している身分なので、仕事ついでに無駄話に付き合わされる事も少なくない。また何かしら与太話のネタでも仕入れてきたのかと、興味は無いが話半分で聞く態勢を取っていると、数枚の写真が持ち出された。

それを見た途端、武蔵の眉が不機嫌そうに寄る。

(……気持ちワリィ)

驚きというよりも、嫌悪の方が先に立つ写真だった。

一体いつ撮られたものなのだろう。月影と武蔵が、事務所内でキスをしている一連の動作が切り取られていた。どこか

ら撮られたものなのかは全く分からないのだが、窓枠が映り込んでいる辺り、遠くからえげつないレベルの望遠レンズでも使ったのだろう。そもそもオフィスに自分達のみが居るといいう状況が少なく、さらに月影が工作中これを許すというのもごく稀な事で、しかもそれが偶然にも外から見える位置であった瞬間。どれだけの時間をかけて撮影したものなのだろうか。一つだけ確実に言えるのは、並の執着心で撮れる写真ではないという事だった。

「で？」

思わず、クライアントだという事も忘れて高圧的な口調で返してしまう。

「で？ って……全然動揺しないんだね。君達ってそういう関係なの？」

「いくらクライアントとはいえ、プライベートな事までお教えする義理は御座いませんが？」

「ふーん。でもキスしてたのは事実だよねえ。ここに証拠があるんだから」

武蔵の手から写真を取り上げて、ひらひらと翳して見せる。「武蔵君が、まさか男もイけるなんて思わなかったなあ。君の事、ずっと魅力的だと思ってたんだ。ねえ、今度俺の相手もしてくれないかな？ チップは弾むよ。何なら小切手に好きな金額書けばいい。どう？ 悪い話じゃないでしょ？」

「職能範囲外です。万一そのような申し出があった場合は絶

対に応じぬようにと、上からもきつく言いつけられております」

事も無げにびしゃりと一蹴すると、男は愉快そうに目を細めた。

「じゃあ、こーれ、世間にバラしちゃってもいい？」

つくづくクズな提案ではあるが、想定の範囲内でもあった。

「やりたきゃやれば？」

なので、冷たい声音で突き放した。

上司と部下でどうこうだの、同性同士が非常識だの、普通はこうあるべきだの、そんなものに対して気に病む段階は、悪いがもう過ぎている。侮蔑も揶揄も、そんなもの、一定数向けられる覚悟は出来ている。それでも自分はこの関係がいいと思ったし、自分の感情や行動や人生を、恥ずべきもの、隠すべきものだとは思っていない。承認欲しさにわざわざ言いふらすような事はしないが、いざとなれば、はいそうですと潔く認めて大衆の面前でキスをするくらいの腹は決まっている。

瞳が揺れるどころか、逆に射貫くような鋭さをもって睨みつけてくる様子を見て、男は、これ以上揺するのは無理だと判断した。だが、別の観点からならどうだろうか。

「……別に武蔵君が断るのは勝手だけど、だったら誰に矛先が向くか分かるでしょ？」

わずかばかり武蔵の表情が強張ったのを見て、先程まで無

かった手ごたえを感じる。思わず口角が持ち上がってしまう。

「月影さんに持ちかけるって？ ……ハッ。バカじゃねえの？ 同じ事言われて仕舞だよ」

「そうかなあ？ 本当にそう思う？」

念押しするようにそう言って、男はゆっくりと武蔵の周囲をもとおり始めた。

「月影君、君と紬ちゃんの事を本当に可愛がってるから。自分の落ち度でこんなもの撮られて、世間に公表されでもしたら、多かれ少なかれ仕事にも差し支えるし、君は勿論、紬ちゃんにも少なからず影響するでしょ？ 自分の身一つでどうにかなるんだったら、絶対に君達の事を守ろうと思うなあ」

「……」

「そーれーにー……ああ、あいつ男と寝れるんだって、そう周知されて困るのって、君じゃなくてむしろ月影君の方なんじゃないかなあ？ そうでなくても彼って性的だし、ヘンな目で見られやすい性質だもんね。好奇の目で見ると一気に増えるだろうなあ」

言い切った後に目の前で顔を覗き込み、ついと顎を持ち上げる。先程までとは違う、明らかに怒りの籠った目線がねめつけてくる。その様に、ぞくぞくと背筋が震えた。

「ねえ武蔵君、分かるでしょ？ 本命は君なんだから、わざわざ月影君を巻き込まない方が、俺にとっても君にとっても

いい事づくめでしょ？ それとも自分の身可愛さに、大事な上司……ああ、この場合は恋人、かな？ を人身御供にするの？」

「ッ……せえなっ！！ やるよ！！ やりゃあいいんだろ！？」

不躰な手を払いのけながら、吐き捨てるように承諾する。ちっとも怯んだ様子を見せない男は「分かってくれて嬉しいよ」とにっこり笑い、それから黒光りする小さな器具……アナルプラグを手渡してきた。

「今度の仕事の日、ちゃんと自分でおしり解してそれハメて来てね？ 痛い思いをするのは嫌でしょ？」

「……は！？ 仕事の最中にンな事出来るわけ……！」

「意見出来る立場なの？ 君今、黙ってて下さいお願いしますって、頼んでる立場だよね？」

「……っ……」

「大丈夫だよ。武蔵君が大人しく言う通りにしててくれればな一んにも起こらないから。じゃ、当日よろしくね♡」

いざ当日を迎えて、依頼人に呼び出されてみれば、他にも複数男が控えていた事にまず驚いた。

「本当なら独り占めしたい所なんだけど……もう年も年だからね。若い奴らにも手伝ってもらおう事にしたんだ」

その思考回路も気持ち悪ければ、社員だか何だか知らないが、わざわざと集まった男達の気も知れない。しかも皆かなり乗り気のように、場は妙な熱気に包まれていた。

「あと、これも着けるからね」

さらに取り出されたのは、二つの輪で付け根と竿の部分を繋げて、下向きの状態でペニスを固定するコックリング。しかもご丁寧に、小さな錠前付きのものだった。

「何で、そんなモンまで」

「エッチな気分になっちゃったら、すぐにお仕事戻れなくて困るのは武蔵君でしょ？ それとも勃起したままお仕事したいの？ そんなのただの変態サンだよね～？」

抵抗を示してはみたが、正論じみた言葉で説き伏せられた。

じっとりと視線が絡みつく中で、膝立ちになり下着とストラックスを下ろさせられる。律儀にローションと指とで慣らして、アナルプラグを仕込んでおいた臀部に、男の指が這って来る。

「今日はココでオナニーしてからお仕事に来たって事だよねえ。最高にエッチだね。今度見てみたいなあ」

今度も何も、こんな事をしてやるのは今日だけだ。それに今日のこれだって、無理矢理されて裂けでもして、その後の仕事に差し障る事を危惧しただけの話だ。期待されているような色気のある話はない。

「ねえ、これから男に抱かれるんだって思いながらお尻慣ら

すのって、どんな気分だった？ 指でやったの？ それともオモチャとか使った？ 気持ちよかった～？」

「ッるせえんだよ！ いいから着けるならさっさと着けろよ！」

それだというのに、ねちっこく問いかけながらプラグをコツコツ叩いたり、リングをハメて上下に軽く揺すったり、微妙な刺激を与えてくる男に思わず声を荒げてしまう。「怖いな～」なんて、大して怖くも無さそうに含み笑いが零された。周囲からも、くつくつと嘲笑じみた音が聞こえてくる。

その後、時たまくちくちとアナルプラグを動かして弄びつつも、コックリングが装着され、施錠された。熱を感じ始めた箇所に与えられる馴染のない締め付けが不快だ。眉間の皺を深くしていると、突然、勢いをつけてプラグが引き抜かれる。

「ンっ！」

「さーて、これでいくら気持ちよくなっても、おちんちん勃っちゃわないから安心だよね♡」

鍵をちらつかせながら指差した先では、一人の男が胡坐をかいて、勃起したペニスを震わせて見せつけていた。

「せっかくおまんこ準備してきたんだから……まずはサクッと一発、ヌク所見せてよ」

どんなに腹立たしくとも、拒否権は無い。

ニヤつく顔と間近で向かい合うのが不愉快で、男に背を向

けて膝をつく。しかしそうすると、どちらにせよギャラリーが目に入る事になる。複数の好色な視線に、今更ながら自分のしている事を再確認して羞恥が湧き上がってきた。なるべく周囲を見ないように床を睨みつけて、自ら穴を広げながら腰を落としていく。

「っ……」

ぴとりと、熱を持った亀頭が触れる感覚。それは雁首に向かうにつれ肉の輪を大きく押し広げながら、徐々に内部に侵入してくる。一番太い部分を納めてしまえば、後は重力に任せて腰を下ろすだけだ。

いくら慣らしていたとはいえ、そこまで念入りにやったワケでもない箇所にも男根がみっちり詰め込まれれば、結構な圧迫感がある。だが今の状況では、ヘンに快感であるよりもそっちの方が有り難かった。

（仕事、仕事、これは仕事……！）

自分自身に言い聞かせて、ゆすゆすと体を揺すり始める。中に残っていたローションがくちくちと音を立て、少しずつ、馴染みが良くなっていく。目を閉じて、真っ暗な視界の中、早く終われと無心で動いていると、背後で「うーん」と唸る声が聞こえた。

「下手くそだなあ。もっとこう……」

腰を引っ掴まれ、体を浮かされてずるりと抜き取られる。

「先っぽから根本までさあ！！」

「ッあゝぐ……っ！！！」

そして、容赦なく腰を入れ込みながら、体を根本まで落とされる。乱暴なピストンの衝撃に喘いでいる武蔵にはお構いなしに、何度も、何度も、その動きを繰り返す。

「ガキの！ おままごとセックスじゃ！ ないんだからさ！ もっと気合入れて！ まんこで扱き上げるんだよっ！ 分かったか！？」

「あ！ ああゝッ！！ わかつ、た！ わかった！ からあッ！！」

返答に満足気にした男が、ひとまず手を離した。

強引に中を穿られた事により、凶らずも柔らかくなってしまった内壁を使って、先程よりもおおきなストロークでペニスを舐めしゃぶる。勢いをつけて先端まで抜き取り、体重をかけて根本まで食い締めていく。先程までの事務的な動きとは打って変わって、嫌でも性交を意識させる動き。ぱちゅぱちゅと響き始めた音も相まって、場の空気が一気に熱を持ったものになり始めた。

「はあ、はあっ……ねえ、お口が御留守だよねえ？ こっちも使ってよ」

「！」

そんな空気の中で、見物していた一人が興奮した様子で武蔵の顎を持ち上げ、目の前にぶるんとペニスを曝け出した。既に我慢汁が滲んでいて、性臭が濃く薫るそれを、ご

しごしと唇に擦り付けられる。当然、啞えるしか選択肢はない。

「おおっ♡ くち、やわらかっ……♡」

不本意ながら口内に招き入れると、満足気な喘ぎ声と共に、鼻孔を内側から雄の匂いが犯していった。下の口で自ら腰を使って陰茎をむしゃぶって、上の口も性処理に使われる。色んな意味で平静ではいられない状況だ。羞恥や、被虐心や、惨めさや……その他にも熱っぽい何かがチリチリと燻って、腰のあたりに溜まっていく。思考を曇らせていく。

「ん、ふっ、ふうっ……う、う……！♡」

武蔵が無自覚に、鼻から媚びた呻き声を零し始めた頃になって、快感を貪っている二人も自ら腰を動かし始めた。口も、アナルも、柔らかい粘膜に肉棒の感覚を刻みこんで行く。

「やらしいなあ……お仕事中的なのに、口でもおまんこでも美味しそうにちんぼしゃぶっちゃって……」

ついうっかりと没頭しかけていた所を、本日このようになった元凶の声ではっと引き戻される。爛々と肉欲を湛えた瞳が、ねめつけるようにコチラを眺めていた。恥ずかしいのに、腹立たしいのに、一方でその視線すらも性感を煽り、ぞくりと背筋に走る物があった。

だんだんと、二人の腰の動きが早まっていく。一人は頭を、一人は腰を掴んで、まるで道具で性処理するように、射精のための動きをし始める。そんな動きに、あろう事か下腹の奥

が甘ったるくなり始めた所、突然二本共のペニスが引き抜かれた。

「ッ、ん……!？」

刺激が一気に取り上げて驚いている武蔵の目の前で、ペニスを扱きたてながら、ティッシュペーパーの中にどくどくと精液が吐き出される。背後の男も同様に吐精を果たしていた。

気持ちよさそうに射精する瞬間を見せつけられて、拘束されているペニスが疼き、それを見透かして戒めるようにコックリングが締め付ける。突如として唾えるものを取り上げられたアナルがひくひく息づく。口の中に溜まった、唾液とカウパー液の残り香を、こくりと音を立てて飲み下した。

「いや～良かったよ～。まずは一発どころか二発も搾る所を見せてくれるなんて～」

上がった息を整えている所に、軽薄な声が割って入る。傍観に徹していた男が、ぱんぱんに張り詰めさせた股間部分を隠そうともせず、アナルプラグを片手に近づいてきた。

武蔵を抱きとめるような形で背後に手を回し、すっかり緩んだ入り口をつぼつぼとプラグで弄ぶ。

「っ♡ あ……」

「んー？ おまんこほじられた後だと、最初のじゃ緩いかなあ？ ……次はもう一個大きいの準備しておかなきゃ」

ぬくぅ……♡ 物足りないサイズのプラグがゆっくりと押し込まれ、今しがたまで陰茎をしゃぶっていた後孔に蓋をし

た。下を向いたまま先端を薄らと濡らしていたペニスもペーパーで拭き取られ、膝まで下りていたズボンと下着を、有無を言わず履かされる。

「今日是一日、お仕事頑張ろうね♡」

耳元で囁かれた言葉が、どちらの意味で言われているのか、なんて、聞くまでも無かった。

今日一日こんな仕打ちが続くのだと、身を持って思い知らされた心地がして、ずくりと体の芯に鈍い痺れが走った。

蓋を開けば、警護任務などもはやただの口実で、武蔵を凌辱するためだけに設けられた場である事は、誰もが分かり切っていた。月影と、紬以外は。

金と権力を使って、自社で大して意味も無い会合を開き、わざわざとSSを雇う口実を作ったのだろう。

折を見ては物陰や空き部屋に連れ込まれ、さくっと引っかけられる感覚でアナルを使われた。大して間を空けずして、次々と猛った肉棒をハメ込まれ、性欲の捌け口にされる。そしてその様子を逐一、ギャラリーや会長の男に視姦され続ける。いくらおごなりに扱われているとはいえ、幾度となくナカを突き回されて淫猥な空気に晒され続けていれば、どう足掻いたって体は熱を持っていく。それに加え、時間が無い時にも、フェラチオや素股を強要させられ、頭が冷える暇も与えられない。そうやって悪戯に昂らされるだけ昂らされて、突然は

い終わりと日常に放り出され、じんじんと痛いくらいに疼く下腹を持って余しながら平静を装う。そんな事を何度繰り返しただろうか。少なくとも両手の指では足りないくらいだ。

あと少しで、せめてドライでならイけそうなのに。そう感じて、工作中だという無意識のストッパーと、後は衆人環視の落ち着いた状況も相まって、どうしても一線が超えられない。溜まるばかりの煩わしい熱をどうにか散らそうと、浅ましくもトイレで自慰をしてしまったのだが、散々ペニスでいたぶられたアナルが今更指の一本や二本で満足できるはずも無く……結局自分で自分の首を絞めるだけの結果に終わった。

それでも月影と紬に気付かれたくない、そして何よりムカつく相手を付け上がらせたくない一心で、何とか毅然とした態度だけは崩さなかったのだが、それにも限界を感じ始めた頃。

便宜上の「仕事」も終わりに差し掛かり、気を抜くとその場に座り込んで膝を擦り合わせてしまいそうな程情欲が高まっていた頃、ベッドのある仮眠室まで連れて行かれた。

「ふふっ。お目眼ウルウルさせちゃって。ムラムラして堪んなくなってるの隠しきれてないよ♡」

マットレスに転がされて、どうしようもなく熱っぽい溜息を吐き出していると、今までは視姦に徹していた会長の男が、いよいよもってペニスを晒しながら乗り上げてきた。ぱんぱ

んに竿を張り詰めさせて、我慢汁で亀頭をテカらせているソレを見せつけられて、あろう事か背筋がぞくぞくと震えてしまう。それ程までに欲情させられていた。

ズボンに続いて下着を下ろされる。白く乾いた汚れがこびりついた上に、さらに粘液がべったりと糸を引いて、むわりと性臭が漂う酷い有様だ。「こんなにパンツ汚す程気持ちよかったんだねえ」なんて嬉しそうに指摘されつつ、ずっと足元まで下すだけだった着衣を、本日初めて抜き取られる。

うつ伏せに寝かし直されて、腹に手を回して持ち上げた臀裂に、すりすりとした熱い塊が擦り付けられた。

「このえっちなおまんこで、今日何本のおちんぼしゃぶっただろうね〜？ 武蔵君のお尻、すっかりスケベ穴として解れちゃったねえ♡」

「んう……！！♡」

ぬちゅ……♡ ぬかるんだ入り口が先端と触れ合って、卑猥な水音を響かせた。もはや、投げかけられるいやらしい文句に反論する気力も無い。

「っ、ひ……ん……！！♡」

ぬぷぷぷぷっ……♡ いよいよといった様子で、欲望をずっしり溜め込んだ陰茎が腸内を埋め尽くしていった。

「奥の入り口も、もうふわふわだあ♡ んん♡ 簡単にちゅばちゅば出来ちゃうよ♡」

「んっ♡ あっ！♡ ああッ！♡ やっ！ それ、ッ♡

やめえっ！！♡」

最奥まで忍び込んだ亀頭が、すっかり緩んでしまっている結腸をちゅこちゅこと搾り、弄ぶ動作で出たり入ったりを繰り返す。それに合わせて、耐え切れない嬌声が室内に木霊する。

（こんなっ♡ こんな、の♡ 仕事中にシていいヤツじゃないっ……！♡♡）

今までの、どこか性処理然としたものとは一線を画した、一番弱い部分を責めてオトすようなやり方に、さんざん弄繰り回され、焦れきった体が悲鳴を上げ始める。もう何も考えたくない。本気でセックスしたい。体の奥から気持ちよくなりたい。イきたい。イきたい。泣きそうなくらい感じてしまって、自分の置かれている状況全てが吹っ飛びかける。

「結腸ハメがキキすぎて、体全部がつくがくなっちゃってるねえ♡ このままハメ続けたら、おまんこイき出来ちゃいそうだねえ♡」

「お♡ あ♡ あっ♡ んんっ♡ ツ……！♡」

男に指摘された通り、このまま力んでいけばイけそうで、自覚もなく息を詰めた。ひくひくと喉を震わせて、柔らかい肉筒を犯すペニスの感覚に全部の意識を集中させる。

「でーも……」

しかしそんな武蔵の様子を見透かすかのように、最奥から亀頭が遠ざかっていく。縋り付くような鳴き声が喉奥から零

れる様子に笑いを嘔み殺しつつ、一転して奥にハマらない程度のピストンが刻まれる。

「ここではメスイキさせてあげない♡ 武蔵君がかわいーくイク所、他のヤツに見せるの勿体ないし」

「あ♡ はあっ♡ あ、あ！♡ ああああっ……！♡」

背後から押し掛かり、お互いにのみ聞こえる程度の声音でそっと耳打ち。雁首で前立腺をしこらせながら蕩けた腸壁を責められる快樂に、武蔵はシーツに額を擦りつけて身悶えた。

「お仕事終わったらウチまでおいで♡ 今度は二人っきりで、ぐずぐずになったおまんこ沢山可愛がってあげるからね♡ 分かった？」

「ん♡ ん……——！！♡♡」

写真と鍵を握られている以上従う以外無いのだが、最高に気持ちよくて最高にもどかしいセックスをされながらこんな事を申し付けられてしまえば、理性が本能に圧倒されて、何もなくても首を縦に振ってしまうに決まっている。がくがくと頷く武蔵を見て満足気な表情を見せた男は、雁首までを中に残してずるりとペニスを引き抜いた。

「んうっ♡ なん、でっ……！ ひんんッ！！♡」

雁首の返しと、張り出した龟头とで、入り口の肉輪をくちくちと弄びながら、竿を自身の手で扱きたてる。思わず非難がましい声を零してしまう武蔵を、一度最奥を穿つ事で黙らせて、呼吸を荒げながら激しく自慰に興じる。

「おおおっ♡ 出るよ出るよっ！♡ 武蔵君の中にザーメンでマーキングするからね！ 俺専用の穴にするからねっ！！ちゃんとメス穴疼かせたまま約束破らずウチまで来るんだぞっ！！」

「っ！？♡ や♡ やだっ！ 中出し、やらっ……♡ ん、う♡ っ~~~~~！！♡」

制止を無視して、粘膜を食い荒らすように熱い精液が流し込まれた。とくんとくんと脈打ちながら吐き出されるそれは、まさに今しがた言われた通り、体の内側からのマーキングだ。たっぷりと自分の匂いの精を流し込み、本日ハメた全てのペニスを上書きした男は、ふうと一つ息をつき、萎えた亀頭を抜き取った。

「お仕事終わった後、楽しみにしてるからね♡」

今日初めての中出し精液を、肉ヒダ一つ一つに擦りつけて馴染ませるような動きで掻き出しながら、さらに念押しする男。深く感じさせられたせいで、甘ったるい痙攣が治まらなくなっている胎内から、全部のザーメンが掻き出されるまで、指での悪戯は終わらなかった。